

「いや、その派出所の巡査が持つてきたんやけどな、飯場に居るもの全員の名前を書いて出せ言らんや」

「それは判りませう。しかし、これはどういう意味ですか」  
私が指で示したところ、一覽表の最下段は(指印)となつてゐるのです。

「指印とわざわざ書いてゐるのは何ですか」

「知らないことわしには判らんへん。いや、待てよ。巡査が何や言うとったな。判コ持たんもんが多かるうから、判コのかわりに指印でええ、たしかそない言うとったわ」  
「バカバカしい。そんなんのへ理屈ですよ」

「？」

「判りませんか。これはいわば居住者調査でしょう。少くともそういう名目になつてゐる筈です。」

「そや、どこでも、普通の家庭でもやつとる言うとったわ」

「普通の家庭にも警察は廻るでしょう。それは警察の仕事かもしれない。だけど親父さん、普通の家庭を派出所の巡査が廻るとき、判コを押せなんて言ひませんよ」  
「そやるか」

「看うですよ。それで当り前ですよ。それなのに飯場に居る者だけ、どうして判コがいるんです？」

「知らんわな。お前が警察に聞いてみいや」

平山親父の巨きな体が後しざりし、その表情には、おびえにも似た困惑が浮かんでゐました。

(力自慢の親父も、注射と警察は苦手なんだな)

と思つたら、その瞬間に、私は自分の興奮に気づいて照れてしまい、黙つて二階に上りました。

飯場の仲間たちに話してみると

「指紋を採るなんて怪しからん」

という意見が多く

「別にかまへんやんか」

と呑気にかまえていた者も、私が説明すると

「そりやそりやな。わいら土方やつてるからつて、悪いことしてへんもんな」

と意見が交りました。

しかし、それなら警察へ抗議に行こうという積極的な人はいません。

(結局、一人で警察と渡り合はんならんな)

そり思つて辛度くてしぼんでくる気分を、無理にもかき立てねばなりませんでした。

舞台の出番を待つ役者や、呼び出しの声を待つひかえ力士の心境に似た、唇がかわいてくるよりな落ちつかないざわめき、それに負けまいとするもう一つの心。

それでいて、一方では猛りたつてくる闘志のようなも

「聞かなくても判つてます。警察は判コにかこつて指紋をとろうとしてゐるんです」

「……」

「もし判コだけですむことなら、何故わざわざここに(指印)と印刷してあるんですか。見えすいた魂胆です。これではまるで犯罪者扱いじゃありませんか。私はこんなもの書きませんよ」

「書かない言うてお前。それじゃ通らんやろ。相手は警察やで」

私はだんだん興奮が押さえられなくなつてきました。

「通るか、通らないか。とにかくこんなもの書きません。だれかが書くなら邪魔してやります」

「何もそこまでせんでもええやないか。お前がそないまで言ひならせんでもええわい。しやけど、明日警察が来たら何て言ひねん」

「この飯場には日野というひねくれ者がいて、こんなもの書いたらあかん言ひてる。そり言つたらいいんです」  
「知らんぞ、わしは。そんなこと言ひたつて通らんぞ。相手は警察やで」

「相手が警察だから拒否するんです。まったく尼崎の警察は何を考へてゐるんだか……」

「知らん、わしは知らん。みんなお前の責任やぞ」

の。

翌日、――警官が来ました。

てぐすね引いて待ちかまえていた私が、抗議の言葉を浴びせかけたのは、いうまでもありません。

(憲法違反)とか(基本的人権)とか、そんな言葉も使つたでしよう。

押し問答めいた会話も少しはありました。

しかし、それは五分とかからずに終つてしまいました。

「とにかく、こんなものは書かない。指紋なんでもつての儘だ」

と言ひ私に、警官はあつさり

「そりですか、では――」

と帰つてしまいました。

「お前、チビのくせに大した度胸やのう」

と親父が呆れました。

「警察をやりこめよつた」

「いや」

私は何となく顔の前で手をひらひらさせ、片付かない気持ちになつてゐました。

警官のあまりにあつさりした退場に、意気どんでいた私は肩すかしをくわされ、ボカンとしてしまつたのです。

電車がどこかの駅に止まり、また動き出し出した。  
「何だ、おれは、あわてて聞きました。」

「ソリ、今の駅はどこだ」

「ソリキレ」

「売り切れ？ 何だそりゃ」

(四)

また霧のような小雨が降り出したのでしようか、車窓のガラスとしては雨は見えないのですが、道行く人の傘でそれを判ります。

池田が突拍子もない返事をしたので、自分の耳がどうかしたのかと思いました。

「アレ。売りきれと違うんかな。売りぬのかなア。何て読むんや」

池田は首をかしげます。そののどかな顔を見ながら、アアと気づいて吹き出しました。

「ハハハ……」それはソリ、売りきれじゃない。メフだよ」

「メフ？」

と言ひよりも、まだ自分のテーマを一つにしほることが出来ず、まずカメラのメカニズムをおぼえること、機影に慣れることの方に集中していました。

要するに四十才近くになって、初めて自分のカメラを持った婦しさに、手当り次第繰りまわっていたというのが真相です。

現場にもカメラ持参でしたし、たまの休日には被写体を求めて歩き廻りました。

花を見れば花、鳥を見れば鳥、風景であろうが、人物であろうが、目にとまるものはみなモデルです。

前の休みには飯坂近くの能勢川を撮り、ついでに頼光の四天王の一人、渡辺綱の墓を求めて小童寺を訪ね、その前の休みには源氏代々の墓(清仲、頼光、義家)や、坂田公時の墓がある清願寺と、その周辺のハイキングコースを歩くといつた有様です。

そして今日は清荒神。

別に信心からのお寺参りではなく、そこへ行けば何か変わった被写体につかるかもしれないという好奇心です。

清荒神はその名の通り、かまどの神である荒神を祭っています。布袋も同居していて、神社か寺院か判らないようなところもある不思議なところだ。

いや、不思議というのは現代人の感覚で、暮末までは

「じゃアなくて、メ、フ、ちよつと変わった読み方だからね。しかし、駅には平仮名で書いてあっただろ」

「そうか、メフか。メフ神社か。ふーん」

「今のが売布神社なら、次が清荒神だ。降りるぜ」

清荒神には以前にも行ったことがあります。神社と寺院が同居したようなたたずまいが面白くて、今日はそれを撮ろうと思いついたのです。

平山姐御に頼まれた神戸行きが、外国人登録は本人でなければというので中止になり、さて何処へ行こうとなつて思いついたのが清荒神でした。

前年末、労災の補償金が入って買ったベトリ一眼レフが、私をすっかりカメラ狂にしてみました。

二〇〇ミリ望遠と二八ミリ広角の交換レンズ、テレプラス二倍、同三倍、屈光フィルター、露出計、それにハイフサイズのサブカメラも一台と、初心のアマチュアにしてはかなりの重装備です。

それだけ熱中していたとも言えますし、こり性なのだとも言えますし。

芸術派だの、社会派だの、あるいは記録派と言ひ、女性専門と言ひ、山岳写真とか、海洋写真とか、カメラマンにもいろいろありましたが、私はそのいずれでもありませんでした。

神仏同居は珍しいことではなかったそうです。

明治の初めに神仏分離令というのが出て、それから神社と仏寺の争いが起るまでは、鳥居と五重塔が一つの祠園におさまる風景が日本中に見られた筈です。

早い話が七福神信仰です。弁財天は印度の女神、大黒天は密教自在天の化身でわが國の大國主命と習合され、恵比須は日本伝来の海上、漁業、商売の神、福祿寿は中國で南極星の化身、びしゃ門天は多聞天ともいい、仏教で四天王の一、寿老人は宋の元祐年中の人、布袋は唐の禪僧と、戸籍調べをしてみれば、昔の人はおおらかで、神仏どちらの信仰をおかしいとも、不思議とも思わなかったということです。

けれども、昭和の現代では、荒神と布袋の同居は珍らしいし、ここには江戸時代の姿が僅かでも残されていると言えるかもしれないと、勝手に解釈して、カメラをかかえてやってきたのです。

四から清三宝大荒神までは、かなり長い参道が続き、その両側には小屋掛けの売店が並んでいます。

陶器の布袋や福助、七福神、宝船などが売られているかと思えば、食べ物屋の屋台もある参道は曲がりくねっていて、僅かながら登り勾配になっています。

その参道を歩きながら、目につく物を片はしからレン

ズでとらえ、シャッターを押す私の背中から、ソーリが傘をさしかけてくれます。

この前、小童寺へ行つた時も、池田ソーリはついて来てくれたのですが、今度もその時同様に、補助カメラや交換レンズ、アクセサリなどの詰めこまれた重いショルダーバックを肩にかけてくれ、おまけに傘をさしているのですから、楽な同行者ではないのですが、不平も言わず、むしろ囁きそりに助手役を引き受けてくれているのです。

まったく、これほどの好人物、これほどの有難い友人は、めったにないでしょう。

その好意を有難い、すまないと思いながら、撮影に熱中し、時々

「おい、望遠レンズ」

「ソーリ、テレプラス出してくれ。それじゃない。3倍でなくて2倍の方だ」

などと偉らそうに言う私は、ずい分、自分勝手なわがまま人間というべきでしょう。

撮影に熱中しているとは言いながら、私の中にはまだ（指紋）とか（外国人登録）という言葉が、ひっかかっています。

去年、派出所の調査は、私の抗議にあつさり引き退り

「……何処へ行くんだろ」

ソーリの声が、突然、耳に入ってきて、私は立ち止まりました。

「何処へ行くって……」

ソーリの愚問に苟立って私の声はとがりました。

「もう着いたじゃないか。ここが清荒神だよ」

いつの間にか雨は上って、木々の緑りも、参道の石も、屋根の瓦も洗われたように光っていました。

人影が少ないのは天気のせいでしょう。土産物店もひとつりしていません。

「そうやないんや。あのな、多田の現場がしまいやろ」

ソーリがあわてて自分の言葉に説明をつけ加えました。あわててとは言っても、彼の口の聞き方はじれったいほどでもたましているのです。

「多田が終つたら、どこへ行くんやろ。尼崎に帰るんかな」

「さア、知らんや」

私はそれについて、親方から何も聞いていません。どこへ行こうと、どうでもいいと思っているのです、こちらから親方に質問したこともありません。

「三田いう噂もあるし、太古がこの前言ってたのは須磨というてたや」

でしたが、それが余りにあつさりしすぎていたので、私の方では当分の間、警戒をゆるめませんでした。こりあつさり引き退つたのは、何かの考えがあつたのではなからうか。

何かまた新しい手を考えてくるのではないか、と心配しました。疑心暗鬼というやつなのです。

しかし、結局何も言わず、この話はそれきりになりました。

だから、それはそれでいいのです。

けれども、尼崎の警察が巧妙な手段で飯場労働者の指紋を集めようとした事実は、未遂に終つたとはいえ確かに残つたのです。

それは、とりもなおさず飯場労働者を犯罪者扱いしているということであり、犯罪者扱いという点で、外国人登録の指紋とびつたり重なるではありませんか。

そしてその二つが私の中で重なるということ私はどう考えるべきか。

などと思いつながら、フラインダーをのぞく目は、絶え間なしに被写体を探し求め、シャッターにかかった指は、ほとんど本能的に休みなく動きます。

売店を見れば売店を、参道を行く女性が美人であればその姿をという具合です。

「太古は誰にそんなこと聞いたんだ」

「道徳町で渡部さんに聞いた言うてた」

道徳町とは松本組の事務所がある所で、渡部というのは、近頃、松本組にやとわれた事務員です。

（渡部が言っていたなら、須磨へ行くというのは或る程度確実な話なのだろう）

と思いましたが、私は何も言わず、相変らずフラインダーをのぞいていました。

石段があつて、その上に山門（と呼ぶのかどうか、とにかくよく神社などで見かける隨身門ではなく、くだけりむねのついた重たげな瓦屋根をのせた門）があつて、その奥にもまた十段ほど石段があり、門の右側には「清三宝大荒神」と彫りこんだ大石柱と、とうろろがある構図にカメラをかまえます。

私を追いこした池田が、門のところで二人連れの老婆とすれ違つてふり向いた瞬間にシャッターを切りました。門を入って石段を上ると、また石段、その上に木立がくれば大屋根、ここでは拝殿というのか、本堂というのかか迷います。

「須磨って、どんなところやろ」

追いつかれた私に池田が答えます。

「海岸の松原が美しいところさ。源氏物語や平家物語で